

---

# 夢喰い人      アイドル注意報

ココ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夢喰い人    アイドル注意報

### 【Nコード】

N4940J

### 【作者名】

ココ

### 【あらすじ】

恋愛ゲームにのめり込む徹は、ある日、夢を叶えてくれる男がいるという噂を耳にする。

徹は一つの願いを胸に、男のいるという場所へと足を向けた。

そこで出会った不思議な男と、そこから始まる奇妙な人生。

男との出会いによって、彼の人生が大きく変わっていく。

この話は、夢を抱く者、それを糧とする者の話です。

初投稿作品となります。

短いお話ですが、読んでいただけると嬉しいです。

## プロローグ

はるは僕を裏切らない。

はるは素直じゃない。

たまにつんけんして僕をじらす。

だけど、僕にとってはそこがたまらなく可愛くて

そんなはるがたまらなく好きだ。

さあ、はる……。

素直になって、僕のほうを見て。

画面越しに君の背中を見ているのは

たまらなくもどかしいんだ。

お願いだから素直になってよ……

僕にはわかってるから。

……ほら、笑っていつものように囁いておくれよ。

そしたら僕も

とびきりの笑顔で言ってあげるよ

君が好きだって。

## 始まり 1

……一人の男性が廃墟に近いビルの間を見つめていた。

人通りの少ないこの道で、男は一人、ただ一筋、長く長く続く細い路地を見つめて立っていた。

暖かい風が吹き、彼の髪を軽く撫で、黒く長めの髪が宙に舞う。

長身のこの男性は、年は二十五前後だろうか。

突き出るように浮いた肩、厚みのない胸板は身にまとう生地の薄いTシャツから見て取れ、決して太くはないジーンズに、一箇所の張りもない。

華奢な体つきは、彼の着ている服装からも一目で判るほどであった。

穿いているジーンズは穿き古したもののようで、本来の張りのある輝きを失い、くたくたによれていた。

散歩の帰りか何かなのだろうか？

いや、手ぶらで軽装である彼だが、その目には迷いはなく、細い路地から目を逸らそうとすらしない。

彼の腕についたアナログ時計の秒針だけが、静かに音を立て、こつこつと時を刻む。

立ち止まり周りの物音にも動じず視線を逸らさないことから、散歩ではなく、彼がここに何らかの理由でやってきたことを告げている。

彼は一心不乱に、路地の奥深く一点を見つめていた。

長すぎて奥の見えない路地はどこか不気味さが漂っていたが、彼は一人、まるでその奥を見を潜める何かに引き込まれているかのよう、ただただ見つめていた。

## 始まり 2 (前書き)

少し主人公の回想じみしています。

## 始まり 2

一つの不思議な噂を聞いたのはほんの少し前のことだった。

街外れの細い細い路地裏に、夢を実現してくれる男がいる。

そんなバカげた噂だったけど、今の僕にとってはまさに願ったり叶ったりの話だった。

何でもその男は、本人と簡単な書類契約を交わし、報酬については何も語らないらしい。

契約書にサインをするようだから、書類に目を通せば何か書いてあるだろうとも思ったけれど、そこまで話を聞かないのはきつと書いていないからなのだろう。

男の住む建物は、強く夢を願いながら路地を通らないと繋がらないらしい。

物理的に考えて、細い一本道を通るのなら行き着くさきは一つのはず。

それなのに逢えた人と逢えない人がいたと言うのだ。

そもそもその男の容姿も、格好も不明で、

”夢を叶えてくれる万能な男がいる”

それだけの大雑把すぎる噂が一人歩きしていた。

そんな適当な噂が何故巷にこんなにも出回っているのだろうか。

その理由は多分、みんなが僕と同じだからなのだろう。

『人というものは誰でもみんな夢を叶えて欲しいから』

ただそれだけに尽きると僕は思う。

とはいえ、僕もそんな一般市民の一人であり、自分でどうにかしようなどとは思わない言わば、思うだけの人間。といって間違いではない。

まあ、僕の夢は叶えたくても叶えようがない、ちょっと特殊な夢ではあるけれど。

「この辺のはずだけだな」

僕は周りを見回した。

入り組んだ道を入ると、人通りの少ない一本の細道へとたどり着く。

そこは、レンガ造りの二つの大きな建物に挟まれた、細い細い路地だった。

いや、噂で言われる路地というには名ばかりで、どうみても『建物同士の隙間』としか言いようがないほどの幅しかない。

細身の女性が一人、やっと通れるかどうかという程の幅の隙間は、いくら僕が痩せ身とはいえ通れるものかと少しばかり不安になる。

でも、どうにかこうにか通らなければ何もかもが始まらない。

僕はたった一つの願いを胸に、この隙間をなんと少しでも通らなければいけないかった。

晴れた空の下、そよ風が僕の髪を撫でた。

僕はゆっくりと呼吸するともう一度辺りを見渡した。

車の通りもなく、人すらも通る気配のないこの辺りは、見渡せばまるで高層ビルが立ち並ぶ現代から遮断された世界のような風貌だった。

レンガで造られているのに温かみの感じられないこの建物。

そして奥の見えない一本の路地とは言えない隙間。

無気味なまでの静けさと冷たさの中で、僕は一つの決心を胸に抱いていた。

そう。僕は夢を叶えてもらうためにこの場所に來たのだ。

大好きな彼女に会うために。

「外に出たのなんか何年ぶりだろう」

僕は一人呟いた。

人通りのない道。

僕にとってそれは望ましいことであった。

僕はここ数年、外へなど全くといって出たことがなかった。

人と関わるのが面倒で嫌だったからだ。

誰かと馴れ合うのは、ゲームの世界だけで充分だった。

そうして僕は自宅に引きこもり、人と関わることを極力避けて生きてきた。

人通りの多いところなんかまっぴら御免だ。

ごうつと音を立てて、先程とは比べ物にならないような強い風が吹いた。

風と共に足元に捨てられていたゴミ達が乾いた音を立て地面を転がりながら細い路地へと吸い込まれていく。

まるで僕をその中へと誘うかのように。

背中を押されるような気配を感じながら、僕はゆっくりと足を動かした。

一步。

二歩。

路地に近づくにつれて一つの不思議な感覚が僕を包み込み始める。さっきまであれほど細く感じていた道が、とても太く、広く感じるのだ。

それは遠近感の一言では片付けられないほどの違いを見せ、横になつて入り込むことがやつとだと思われたそこは、堂々と正面きつてはいつても肩をかすりもしなかった。

体を縮めても、歩きにくい様子もなければ、大股で歩いても両手を大きく開いて歩いても決して壁にぶつかりもしない。

まるで僕に合わせて壁が伸縮しているようだった。

長く長く終わりがないように感じる。

暗くて先の見えない路地を歩きつづけながら、一生辿り着けないのではないかと僕は不安になった。

路地の向こうに黒ずくめ（前書き）

ここからもう一人登場します。

大本締めのお男です（笑）

## 路地の向こうに黒づくめ

どれくらい歩いたのだろうか。

何の変化もない路地をひたすら歩きつづけていた僕にとって、その時間は果てしなく長く感じた。

やがて、一筋の光が見えたかと思うと、一瞬にして輝くほどの光になり、僕は思わず目を瞑った。

そして、閉じていた瞼に光が入り込み始めるのを確認し、僕はゆっくりと目を開ける。

細い路地を、暗闇の中歩き続けたそこには、日差しを浴びて光り輝く一軒の木造ハウスがあった。

まるでそこは、ひっそりと身を隠しながら誰かを待つかのように、静かに、そして眩しい位に輝きながら。

建物の前にはレンガが敷き詰められた広場が広がっていた。

そこは一見ロータリーのような気もするが、見渡す限りでは車が通れるほどの道がないためただただ広い庭といったほうが正しい。そうだ。

レンガの敷き詰められた広場の真中には、円形状のガーデンがあり、高い木が森を思わせ、その根元にはたくさんの花々が咲き誇っていた。

その奥に建つ、木造の一階建ての建物は、こげ茶色の三角屋根の元玄関サイドにはウッドデッキが設けられ、屋根と同様にそして壁共々茶色に塗られていた。

茶をベースとしたこの家屋であるが、一箇所だけ、玄関のドアに限ってはそこを強調させるかのように純白であった。

玄関周りにも鉢植えが置かれ、どこを見てもまるで森の奥に建つ一軒の家のように草木に囲まれている。

この建物に、長い年月を感じさせるかのように、屋根から壁へ、

壁を伝い地面へと、長く多くのつたが伸びていた。

一見都内のおしゃれなカフェにも引けを取らないような佇まいのハウスは、日の光を浴びて緑葉が輝き、僕をどこかおとぎ話にでも迷い込んだかのように思わせた。

この先で、何が待ち構えていようかなど、全くといっていいほど想像できなかった。

僕は、一呼吸置いた後、ごくりと生唾を飲んだ。

暗闇にすっかり目が慣れてしまっていた僕は、瞬きを数回しても尚、ちかちかとする視界の中を、ふらふらと建物に向かって歩き始めた。

固いレンガの上を歩くとこつこつと足音だけが響き、その静かさはまるでこの世界には僕以外存在しないんじゃないかと思うほどだ。広場を横切り、建物の前まで来ると、植木の周りをキレイな蝶々たちが飛び交っていた。

ぼくはその間を通り、玄関前の階段をゆっくりと上る。

(カランカラン)

アンティーク調のくすんだ金色のドアノブを回すと、高いカウベルの音が室内に響き渡った。

迎い入れる声もない室内は、カウベルの音がやむと再び静寂を引き戻す。

室内には外からの日差しが差し込んでいたものの、外と比べて大分薄暗かった。

それでも、日差しの他に落ち着いたオレンジ色の電飾に照らされた室内は、一昔前のような柔らかい印象さえ受けた。

見回せばまるで書斎のように本棚が建ち並び、本がぎっしりと詰まっている。

「すいませーん」

声を張り上げてもしんとした室内。

僕は入り口で立ち止まっていたものの、意を決して奥へと踏み込

んだ。

「誰か居ませんか？」

そついいながら奥へと足を進めると、リビングのような広さの部屋に出た。

そこには建物と同じように木で作られた、正方形の机が置かれ、寂しそうに二つのイスが並んでいた。

更にその奥へと視線を送ると、それに比べて少し小さめのデスクがあり、本やら書面やら、様々なものが入り混じったまま今にも崩れそうに積み上げられていた。

本当に、ここは僕の夢を叶えてくれる人の居場所なのであろうか？

なんの動きも物音もないこの空気に、僕は若干の不安を感じていた。

上からは電飾、窓からは光が照らしてとは思えないほど室内は薄暗く、本棚や机をオレンジ色のライトが照らしては黒く影を作っている。

室内は不気味なほど静かで、自分の問いかけに誰一人として答えてくれる雰囲気がない。

人がないとはまさにこのことだ。と、僕は立ち尽くしていた。

と、その時だった。

「おやおや、貴方は。ゲーム評論家の三森徹さんではありませんか」突然、背後から声がした。

その声は低く、やけに静かな声色だった。

近くに来た気配すら全く感じる事が出来ず、突然の声掛けに僕はぎょっとして肩を揺らした。

振り向けば、全身黒づくめの一人の男が立っていた。

「貴方のような有名な方が、こんな辺鄙な所になんの御用がおりますか？」

そついいながらこつこつと靴音を鳴らしながら歩み寄ってくる姿は、日の光を浴びても真っ黒で、頭には深くチューリップハットを

被っている。

その顔はハットのつばが邪魔をして影を作り、遠目に見れるものではなかった。

細身の黒いスーツを身にまとい、真つ赤なネクタイを律儀に締め、臍までだらりと垂れた長いマントを羽織っていた。

長くつま先の細い革のブーツを履き、がに股でゆっくりと、そして大きな歩幅でこちらに近寄ってくる。

右手にはカフェオレなのか、ミルクティーなのか、乳白色のかった液体が入ったグラスを持ち、左側は腕をだらんと下げて大きな真四角のトランクケースを握り締めていた。

「おっと失礼いたしました。夢を叶えたいからでしたねえ」

前かがみになった上半身を揺らしながら、男はくすりと笑った。

猫背の背中の子いなのか、伏し目がちにあつた顔を上げてても男の顔は見えない。

長い前髪が鼻に掛かり、男の目・・・というか顔の上半分は全くといっていいほど隠れてしまっていた。

「何故僕の名前を・・・」

「それは愚問というものですよ。あなたのことは何でも知っています。そして何より、あなたは有名人ではありませんか」

男は、唯一見える口を左右大きく引き上げ、不気味ににやりと笑った。

「ころん、と音を立て、彼の持っていたグラスの中の氷が崩れた。

「飲み物でもご用意いたしましたよ。客人にご用意せず、私だけ持っているのではあまりに無作法だ。すぐにお出し致します」

男はそう言うと、僕の横を通り、正方形のテーブルの横へとトランクケースを置くと、僕がまだ足を運んでいない奥の部屋へと姿を消した。

すれ違い様に、横目でそっと彼を見遣ると、身長は高く、百八十近い僕が更に見上げる形となった。

優に百八十は超えているだろう。

そして、全身と同じように真っ黒のトランクケースが、入る前の細い路地のどこか底の見えない深さを感じ、僕はつい見入ってしまった。

そうして、また一人となった僕は、もう一度室内を見渡した。

戻ってきた静寂だが、室内はさつきとは違い、主が居るといふ独特の雰囲気醸し出していた。

高い天井。広い室内。

木目の床に、木目の壁。

広い箱の中に、ぽつんと小さく浮かぶ二つの机。

僕は主の断りを得ることもなく、様々なものが積み上げられた机ではないほう・・・つまり正方形の少し大きめの机の近くに置かれたイスへと腰を下ろした。

(夢を叶えたいからでしたね)

静寂の中で、僕の心でもう一度彼の言葉が繰り返される。

それが当たり前で、何事もないかのように言っただけのあの男。

僕はぶるつと体を揺らした。

これは恐怖なんかじゃない。

これから起こる何かに対しての武者震いであり、期待の現れだった。

僕はついに来てしまったのだ。

たった一つの夢を叶えるために・・・。

イスに座ってから僕はずっと室内を見渡していた。

天井から一本ぶら下がっているライトは、彼が被っていたチューリップハットと同じような形をしていて、電球が一つ、はめ込まれていた。

よく見れば大きな本棚の横の壁にも電飾があり、スズランのような形で縦に三つ電球が光っている。

僕はしんとした空気の中で、イスに座ったまま体を回転させ、洒落た室内をずっと見ていた。

大きく縁取られた窓と入り口以外、どこも本棚が置かれ、そこに

はおびただしい程の量の本が所狭しと詰め込まれている。

「お待たせいたしました。ピーチティがお好きでしたね。甘さ控えめの」

ドアが開かれ、男は静かな声でそう言うと、僕の座っているテーブルへとまっすぐ足を運び、静かに飲み物をテーブルへ置いた。

何事もないかのような言い方だったが、ここにきて僕はやっとあることに気が付いた。

「あの・・・どうして僕のことを・・・」

名前はともかくとして、僕の趣味、そしてここに来た目的。すべてにおいて彼は僕のことを熟知しているような物言いなのだ。

そして、僕がここに来ることがずっと前からわかつていたかのよう

に。  
近くに来た彼の方に向き、底の見えない帽子の下の暗闇を、僕は食い入るように見上げる。

彼は相変わらず薄笑いを浮かべながら手にもった飲み物をストロ―ですすった。

「私は」

彼はそう言って口を開くと、こつこつと音を立てて僕の向かいに回り込み、後一つ残っていたイスへゆつくりと腰を下ろした。

「私は、貴方のことはすべて知っています」

年齢、職業、ここに来た目的、そしてあなたの過去にあった全ての出来事を。と彼は続けると、先程僕にしてくれたように、自分の目の前にグラスを静かに置いた。

揺れたグラスの中で、氷が涼しげな音を立てて崩れた。

そうして彼は、深く被っていたチューリップハットを右手で深く被り直し、更に顔に影を作る。

彼はイスに座り一息ついた後、足元に置かれていた漆黒のトランクケースから分厚い冊子を取り出した。

オレンジ色のライトを浴びて薄ベージュに染まるその冊子は、厚さ二センチはあるだろう。

「夢は・・・ゲームの主要キャラ“はる”さんに逢いたい」  
冊子をペラペラとめくり、一枚の紙で動作を止めると、そう呟いた。

そう、僕は“はる”に逢いたくてここにやってきたのだ。

「ふむ・・・これは難しい願いだ」

彼はそう言っつて、更に冊子をめくり始めた。

なにやら小言を呟いているようだが、机を挟んだ場所にいる僕にははつきりと何を言っているかはわからない。

僕は無言で彼の様子をうかがい、目の前に置かれていたピーチエイを手にとった。

琥珀色の液体からは甘い桃の香りが漂い、僕の鼻を刺激する。

一口飲むと、適度な甘さが口に広がった。

僕はこの、紅茶の味を損なわれない程度の控えめな甘さが好きだった。  
もう一口、とグラスを持ち上げたとき、冊子をしばらく見ていた

彼が、何やら思いついたように言った。

「おっと」

まず、私の自己紹介を。

彼はそう言っつと、口元をあげ、にやりと笑った。

冊子をテーブルの上におき、それを両肘で挟むように肘をつき、

口元で両手を組んだ。

「私は人間の夢を叶えている者です。名前は、まあ特にないのですが、バク。とでも言っつておきましょうか」

丁寧な物言いだ、挨拶時の所作であろう、帽子を取る、ということとはしなかった。

「徹さん、あなたの夢ははるさんに逢いたいとの事ですが・・・ふふふ、恋ですか」

バクさんはそう言っつと俯き、含みのある笑い方で声を出して静かに笑った。

「バク・・・さん。そうです。僕は彼女が好きなんです」

バカらしいと思うだろう。だけど僕は彼女が好きだった。

「はるは、僕を絶対に裏切らない」

なぜなら彼女はゲームだから。

僕は独り言のように小さな声で呟いた。

そうだ、プログラミングされた恋なら、幸せになれるのはわかりきっている。

そして、他の男に目移りする心配もなければ、嫌われることを恐れる必要もない。

「知っていますよ。過去に裏切られたことのある貴方だ」

彼は含みのある笑いと共に、僕の心を見透かすように言った。

「貴方は生身の人間と恋が出来ない」

バクさんはそう言っただけで飲み物を口に含んだ。

人間なんて汚いものだ。

僕は彼の言葉に口を紡いだ。

人間なんて汚いものだ。

一緒に積み上げてきたものをいとも簡単に壊していく。

ゲームの中の彼女は壊すことなく僕を幸せにしてくれていた。

「あ、口を挟むようですが、呼び捨てで構いません。あなたは雇い主だ。私は依頼を頂いて働く。つまり女王蜂があなたで働き蜂が私というわけです」

黙り込んだ僕を見て、彼はそう言って笑った。

「あなたは私の依頼主だ」

もう一度彼はそう唱えた。

無音の時間が流れ、柔らかい日差しの中で僕とバクは二人、机を挟んで見合っていた。

不思議な人だ。

彼の身にまとう吸い込まれるような漆黒は、まるで僕のすべてを受け止めてくれるような印象を与えていた。

「僕は恋愛ゲームの評論家です」

沈黙を破ったのは僕のほうだった。

ぼつり、ぼつりと、今まで溜め込んでいたすべてを口が語る。  
「出会いはいつもの通りだった。仕事で持ち込まれたゲームを、いつものように始めた」

そして、僕ははるに出会った。

「ゲームを進めるうちに彼女のすべてに惹かれていった」

まるで生身の人間のように、いやそれ以上に、生き生きとしている彼女は、廃れた現実のなによりも輝いていた。

ころころと変わる表情。

女性らしい仕草。

すべてがプログラムされたものだと思っていても、その思いは募るばかりだった。

半分ほどに減った飲み物を、彼はストローでゆっくりとかき回しながら黙って聞いていた。

「彼女を見ていると、人間というものがどれだけ汚いかと言うことが身に染みた」

そう。彼女を見ていると現実がバカらしく思えて仕方がなかった。

「僕は人間と言うものが大っ嫌いだ。いつか絶対に裏切られる」

「ふふふ・・・感情とは面倒なものです」

「しかし、ゲームならそんなことは起こり得ない」

ここまで言うと、僕は高ぶり始めた感情を落ち着けるために、ゆっくりとした動作でピーチティを飲んだ。

「それに比べて人間なんて・・・」

グラスの中で波打つピーチティを見つめ、顔を歪めてそう呟いた。  
「僕は昔恋愛にトラウマがありましたね。人間不信というか、どうにも苦手なんですよ」

薄暗い室内、落ち着いた空気、そしてゆっくりと流れる時間に影響されたのか、僕は話し始めると止まらなくなった。

今まで溜め込んできたすべてを誰かにぶちまけたくなって、それは一呼吸置いた今でも抑えが効かなくなっていた。

「徹さん」

「彼女が・・・いや、元カノが・・・親友と浮気をしていました」  
大好きだった晴美が・・・自分の親友と。

バクが僕の名前を呼ぶ声が聞こえたけれど、僕は歯止めが利かなくなり、今まで誰にも言っていた事がない古い思い出をついに口にしました。  
「徹さん」

暴走しだした僕を制止するかのようには、バクはもう一度僕の名を呼んだ。

俯いて静かになった僕を見ると、バクは小さく溜息をついた。

「先程申し上げたはずです。私にはあなたのすべてが手にとるようにはわからない」

彼は静かな声で、ゆっくりと、そう言った。

「ゲームにはまり、はるさんにのめり込んだ。貴方が過去のそれを彼女と重ねあわせ、更に人間に嫌悪感を抱いていることも全て」

すべてがわかる彼であっても、僕のあのときの気持ちなんか絶対にわかるわけがない。と僕は心の中で毒づいた。

「しかし私はそれらすべてになんら興味などない。無論、あなたという人間にさえ」

「・・・え」

思いもよらない言葉に、僕は俯いていた顔を上げた。

相変わらず彼は不気味な笑いを浮かべていた。

「ですがね、徹さん。私はたった一つだけ興味をそそられるものがあるのですよ」

なんだとお思いですか？と、彼は続けた。

その顔は出会ったときから一度も変わらない。

なんだろう、と僕は悩み、頭を働かせて悩んでも答えがでなかった。

「あなたの夢ですよ」

「夢・・・」

「そう、はるさんに逢いたいというあなたの夢」

バクは水滴のついたグラスを持ち上げ、再びストローで飲んだ。  
「やっぱり飲み物はカフェオレに限りますねえ」  
そう言ってから、足元にあったトランクケースを膝のうえに抱え、  
きちんと留め具を外すと中を漁り始めた。

## 契約（前書き）

執筆ペース遅くてすみません・・・。

## 契約

開けたトランクケースの中はよく見えないが、中も黒張りのトランクケースはやはり最初に思ったように奥の見えない深さがあるように感じる。

「ああ、報酬はいりません」

彼は素晴らしいながらも手を止めず、トランクケースの中を覗き込んだままだ。

浅い所を探ったり、奥まで手を入れて探ったり、彼は必死に何かを探していた。

「でも」

「強いて言うならば。貴方が夢を叶えることこそが報酬と言えます」  
言いかけた僕の言葉を制し、彼はそう言った。

無償で夢を叶えてくれる。

僕にとってなんと都合のいいことだろうか。

未だトランクケースを覗き込んでいるバクの目の前で、僕の顔から自然と笑みが零れ落ちた。

「ああ、ありました」

トランクケースから顔を上げると、バクはおもむろに一枚の紙を取り出した。

B5サイズの紙はほとんど真っ白で、真ん中に三行ほどの文章が書かれているだけだ。

テーブルに置かれたその紙を、不思議そうに見つめていた僕に彼は言う。

「これは契約書です。貴方と、私の」

すつと、テーブルのほぼ真ん中に差し出された紙を自分のほうまで引き寄せ、僕はその紙をじっくりと見つめた。

一、貴方の夢を叶えさせていただきます。

- 二、金品の報酬は一切頂きません。
- 三、報酬として、貴方の夢を頂きます。

私はこの三点に同意致しました。

短い文章の下には、サイン欄があり、バクのサインは既に書き記してあった。

「あとはあなたのサインだけです」

契約の穴の有無など、探すに値しないほどの短さだった。

唯一言うならば、三番についてだろうか。

「あの・・・この三番は」

「言い忘れる所でしたよ」

「はあ・・・」

「私は、人間ではありません」

「はあ？」

突然、バクが意味のわからないことを言い出した。

つまりないジョークだろうと彼を見るが、表情に変化はなく、薄笑いを浮かべて僕のほうを見ている。

「人間ではない。私は夢を糧として生きている夢喰い人です」

彼は更に話を続けた。

「こんな話を聞いたことはありませんか？古来より、悪夢を食べるとされる動物の存在。そうです、獾です」

私は、獾と同じように、夢を食べて生きています。

バクはそう言うと、少なくなったカフェオレをからからと乾いた音を立てて飲み干した。

人間ではない。

その言葉がどうにも現実からかけ離れていて、僕の頭は混乱していた。

「私は人様の夢を勝手に食べると言うのがどうも苦手ですね。こうして契約を交わした方の夢を糧として頂いているのです」

混乱していますか？と彼は僕に質問した。

どう見ても人間にしか見えないのに、人間ではないと言われて混乱しない人なんか居るのだろうか。

彼の言葉の半分も、今の僕が飲み込むことは不可能だった。

「貴方の夢を叶えるかわりに、睡眠時の夢を私が頂く。それだけの簡単なことですよ」

「本当にそれだけなんですか？」

「ええ。私は夢という糧だけが欲しい。それだけです」

簡単に説明してくれたバクに感謝しよう。

そして、この際人間ではないと言うことはどこか隅に置いておいて気に留めないようにしよう。

僕は頭の中を軽く整理すると、もう一度契約書を見た。

ぼつんと真ん中に書かれた三つの箇条。

こんな都合のよすぎる話が他にあるのだろうか。

バクの顔を今一度見るけれど、彼の表情に変化はなく、何度見ても帽子の下に出来ている底の知れない影と、前髪に覆われ、見えないう目が不気味で仕方がなかった。

僕は、契約書とバクを交互に見遣った後、即座にペンを持つ。

「僕は、夢を叶えたいんだ」

まるで呪文のように唱えると、僕は契約書にサインをした。

「これで契約成立ですねえ」

彼はのんびりとそう言うと、契約書を自分のほうに引き寄せ、細く丸めて両手で握った。

あがっていた口元を更に上げ、やがて白く並びの良い歯が剥き出しになる。

黒い闇に囲まれて浮き出たそれは、浮かんでいた笑顔などは比にならないほど不気味であった。

細い路地とその向こう(前書き)

何が待っているんでしょう・・・？

## 細い路地とその向こう

『明日、もう一度、今日ここへきたように路地を通ってください。時間はいつでも構いません』

昨日言われた言葉を胸に、僕はまた路地を見上げていた。

『徹さん……。七月九日、つまり明日は、貴方にとって忘れられない日になりますよ』

昨日と同じように風が吹くと、先日バクが言っていた言葉が、風に乗って頭の中を流れた。

この路地を通れば……。

ついにはるに出会える。

高鳴る胸を抑えることなど僕には出来なかった。

再び見る路地は、やはり僕が通れるほどの広さなどない。

細く、隙間としか言いようがないほどの幅しかないのに、昨日はどうして僕はここを通れたのだろうか。と不思議になってしまふ。

「はる……。今会いに行くよ」

昨日感じた感覚と同じ物が押し寄せる。

広がる路地。

やはり僕に合わせて、僕を迎い入れるかのように、伸縮しているようだった。

奥の見えない深い闇。

昨日とは打って変わり、この闇の先に待ち受けるすべてのことが楽しみで楽しみで仕方がなかった。

やがて一筋の光が見えたかと思うと、それはあつという間に僕の身を包み込むほどの大きな光になる。

この先には昨日訪れたあの一軒の木造ハウスがあり、バクが待っている。

そう思うと自然と笑いが溢れてくる。

「さあ・・・さあ！」

僕はそう叫ぶと、更に早足に先を急いだ。

僕は深呼吸をすると、まっすぐと路地に向かって歩き始めた。

## 夢と現実（前書き）

閲覧ありがとうございます。

ついにバクさんの本領発揮です。

## 夢と現実

「どこだ・・・ここは」

たどり着いたのは、見たことのない風景。

昨日の一軒屋の面影もなく、立ち並んでいるコンクリートの壁、そして閑静な住宅街。

昇りつめた太陽の下、昨日見た風景など微塵も感じさせないほどのものだった。

「お早いですねえ」

前から歩いてきたのは、この炎天下だというのに昨日と同じく、長いコートを羽織り全身黒づくめのバクであった。

「はるはどこだ?!」

僕は人目も憚らず、彼に向かって叫んだ。

「ふふ・・・そんなに急がないでください」

「なんだ・・・夢を叶えてくれるんじゃないのか?さすがにムリか?」

僕はあざ笑うように彼に言った。

ゲームの中のキャラクターを具現化するなんて、いくらなんでも無理か。

「夢は自分で叶えてこそその夢ですよ」

彼の言葉に僕は舌打ちをした。

夢を叶えるとか言っておいて、結局は自分で叶えるんじゃないか。そう思うと途端に彼の存在自体がバカらしくなってくる。

「でないと面白くない・・・ふふ」

「何か言いましたか?」

「いえ、何も」

彼は小さな声で何かを呟いたみたいだったが、興奮冷め遣らぬ僕の耳には全く届かなかった。

「で、これからどこへ？ここはどこですか？」

「貴方の良く知る場所ですよ・・・ふふ。道なりに行けば着くはずですよ」

「わかるわけないだろ！この先には何があるんだ！」

何度聞いても返って来る言葉は同じで、バクは答えを言わずはぐらかしている。

返って来ない答えに、僕は抑えきれず怒りをぶちまけるように怒鳴りつけた。

「貴方はご存知のはず。この先にあるものを」

怒鳴り声にも動揺する様子はなく、バクはびくりとも顔色を変えず、絶えず薄ら笑いを浮かべている。

苛立ちながら周りを見渡すけれど、どこにでもあるような住宅街だ。

この先にあるものなんか何一つ思い浮かばなかった。

「この先にあるものは一つしかないじゃありませんか」

バクはふふ、と笑いながら一人一本道を歩き始めた。

僕も慌てて後を追うが、この先にはるが待っているのだろうか？

僕らは長く続く道を、ひたすら歩いた。

「このお店・・・」

僕は一つの建物で足を止めた。

どうしましたか、とバクは立ち止まった僕に気づくと、引き戻り

僕の横で立ち止まった。

そこは時代に流されることなく、ずっと続いている駄菓子屋だった。

古びた外装。

ペンキの落ち掛けた看板。

懐かしいお店の名前。

高校時代、帰り道にあるこの店へ、僕は元カノとよくここへ来たっけ。

まさか。

僕は薄れ消えかけていた記憶を手繰った。

そう、この先にあるのは一つしかなかった。

この先は行き止まりだ。

いや、正しく言えば行き止まりではない。

この先にあるのは、あの忌まわしい思い出の舞台、公園だった。

「どうやら思い出したようですね」

バクは変わらぬのんびりとそう言うと、にやりと笑った。

「何故ここへ・・・」

「さあ？私は夢を叶えるのが仕事ですから」

彼はチューリップハットを右手で直すと、再び一人歩き始めた。

彼の言葉が気になって僕も慌てて後を追う。

照りつける太陽が時計を見ずとも時間を告げてくれていた。

高く昇る太陽。

今は昼時なのだろう。

登校時は賑わうはずのこの道も、しんと静まり返り人の影などまるでなかった。

僕はバクの後をひたすら歩いた。

そう、あの日も腹が立つくらいに快晴だった。

(僕の心は土砂降りになったのに)

この曲がり角。

ここを曲がればあの忌まわしい公園はもう目の前だった。

そこで僕は、心をずたばろに引き裂かれたのだ。

やめて、やめてくれ!

僕の心は悲痛な叫びでいっぱいだった。

こんな出来事なんか思い出したくなかった。

「ここは、あなたの高校時代。過去の世界です」

私は、あなたの夢を叶えるためにここに来た。とバクは言った。前を見たまま、彼は足を止めようもしない。

「行きたくなんか・・・」

「そうですね? けれどあなたの足は止まっていますか?」

曲がり角に差し掛かっても僕の足は止まらなかった。

夢が叶う。

はるに会うためだったらどんなことでも試したかった。

例えば自分を犠牲にしても……。

長いブロック塀が終わり、僕らはずいぶん公園の目の前にまでやってきた。

ひと気のない公園は、小鳥のさえずりだけが響いていた。

この先で、あの現場をもう一度目の当たりにするのかと思うと反吐が出そうだった。

それでも、バクの足は止まっていなかった。

『さあ、行きましょう。スパイスがなくては……甘いだけでは美味しくない』

彼は小さく何かを呟いてから足を速めた。

「ま、待ってくれ！」

一人取り残された僕は、慌てて彼の後を追った。

ブランコ、滑り台、ジャングルジム、放課後ここへきて長い時間二人で話しをしたっけ。

あらゆる場所で彼女との思い出が引き出され、僕は何も視野になど入れたくなかった。

この先にあるベンチ。

そこで僕と彼女、晴美は暗くなってもずっと、二人でよく笑いあっていた。

そんな楽しい思い出をぶち壊したのもそのベンチだった。

僕の親友とそこに座り、抱き合って頭を撫でられていた晴美。それは誰が見ても、恋人同士の語らいに他ならなかった。

「い、いやだ」

見たくない。

今でも鮮明に思い出すあの光景なのに、その現場など僕は二度と目の当たりになどしたくなかった。

僕がそう言つて足を止めると、バクが一旦足を止め、僕のほうへと引き返してきた。

「ほら、もうすぐではないですか」

彼は僕の腕を掴むと、物凄い力で僕を引っ張った。

止まった足が動き出す。

「やだ！いやだ！」

手を振り解こうともがいても決して解けることはなく、彼は頑なに僕の腕を掴んで離さなかった。

いよいよベンチの前に差し掛かる。

「見てみてください」

あれほど解けなかった僕の腕を掴んでいた手が、あっけなく解かれた。

「あ……」

目の前にあるベンチには誰も座ってなど居なかった。  
それは当たり前だ。

あの二人が座っているはずなんかない。

だってあれは過去の話なのだから。今更あの現場に遭遇するわけ  
なんかない。

深緑に塗装された鉄製のベンチ。

広くも狭くもないその幅は、二人座ると丁度いいくらいの大きさ  
だった。

僕はベンチを見つめたまま、バクが居ることも忘れてただ呆然と  
していた。

ここで抱き合っていた彼ら。

そこに至るまでの過程の、見つめあって笑いあっている姿が目  
浮かぶようだった。

「もうじき、晴美さんと親友の……信彦さんでしたか？がやっ  
てきますよ」

「え……？」

僕は突然言われたことに目を見開いて彼を見た。

相変わらず薄笑いを浮かべている。

「先程言ったじゃありませんか。これは過去です。そして今日はあ  
なたのあのトラウマを作り出した日」

「トラウマなんか」

「いいえ、あなたはそれから人と接することをやめてしまった。あ  
の浮気現場、それこそがあなたのトラウマです」

彼は静かにそう言った。

「ほら、彼女達がやってきますよ……ふふ」

鉢合わせなどしたくなかった僕は、慌てて近くの木の裏へとバクと身を潜めた。

笑い声の聞こえない中、僕の元彼女、晴美は、僕の親友信彦を連れてやって来た。

あれ以来彼らと疎遠になってしまっていた僕は、久しぶりに見た晴美と信彦の顔に、憎らしいと共にどこか懐かしさを感じていた。

あの日、僕は一人帰宅途中にふらりと公園に寄り道をした。

晴美は用事があるからと先に帰宅し、信彦は部活があるからと一緒に帰ってくれなかった。

たまたま公園を寄り道してしまった…その気まぐれのせいで浮気現場を目撃してしまった。

晴美の裏切り。

そして何よりも、今まで親身になって僕らを応援してくれていた親友の裏切りに僕の心は張り裂けた。

二人が理由付けてまで僕と帰らなかったのは、逢引きしていたからに他ならなかった。

信彦は真面目な僕と違って、明るく運動ができ、社交的で周りに友達が多いやつだった。

今思えばそんなやつが僕なんかとつるんでいたのが不思議なくらいちくはぐな僕らだった。

だけど僕らはいつも三人一緒だった。

高校に入ってからからの付き合いだったけど、それはとても深い絆で結ばれているものだと思っていて疑わなかった。

天秤にのせられた僕と信彦。

信彦を選んだ晴美が憎らしかった。

あれほど好きだと言ってくれていたのに。

僕に太陽のように笑いかけてくれていたのに。

そののすべてが作り物だったのかと思い、僕は一つ結論にたどり着いたのだ。

女なんか信用できない。

それが最終到達点だった。

それに加えて、友情なんて脆いものだとも思い知ったのはまさにこのときだった。

僕が人間不信になったのは、バクが言う通りこの時だ。

この時から僕は、女性不信になり、人間不信になった。

どうせ裏切られるくらいなら、最初から関係を持たなければいいとさえ考えるようになった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4940j/>

---

夢喰い人     アイドル注意報

2010年10月10日00時25分発行